

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17195

研究課題名(和文) グローバルな相互理解の場としての国際政治活動プロセスに関する実証研究

研究課題名(英文) Global Justice Movement: The Sphere of International Mutual Understanding

研究代表者

富永 京子 (TOMINAGA, KYOKO)

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号：70750008

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、2016年度に刊行した博士論文を本とする単著『社会運動のサブカルチャー化』(せりか書房)、『社会運動と若者』(ナカニシヤ出版)、また論文(英語1報、日本語3報)を通じて、現代社会における「カウンターカルチャー」から「サブカルチャー」としての社会運動の変容を捉えることが可能になった。かつて一つの組織や党派として括られていた社会運動は、作法や規範に対する考え方の違いをめぐって分化し、その背景には個人化・流動化がある。

今後の可能性として、従来の中間集団・中間団体の有効性が低減している中、流動的なキャリアを持った人々を包摂する「社会的プラットフォーム」としての社会運動研究を提示したい。

研究成果の概要(英文)：Two monographs (in Japanese) and four articles (one in English and three in Japanese are published. Two of fours are refereed). This research discusses from a cultural perspective how Japanese activists deconstruct conventional forms of organization and collective identity to construct alternative type of activism in contemporary Japan. Previous studies have regarded social movement as an organizational behavior based on collective political identity. However, the situation has drastically shifted after individualization and fluidalization.

This research argues that the shift of social movement has much to do with the decline of counterculture in the era of individualization. Protester's participation in social movement does not show a shared ideology, principle, political style against the mainstream, which counterculture used to have and differentiate into numerous kinds of subcultures with individualized fashion, preference and purpose of political participation.

研究分野：社会学

キーワード：カウンターカルチャー 社会運動 グローバリズム ツーリズム 観光

1. 研究開始当初の背景

世界的に経済格差が広がる中、NGO (Non-Government Organization) が途上国を支援することは珍しくない。こうした活動の中でも、G8 サミットや WTO (World Trade Organization) 閣僚会議は支援に不可欠な公衆衛生や貿易等の政策を決定する重要な場である。会議が開催されるたびに、多数の NGO が会議開催地に集まって政策を提言し、閣僚と交渉をする。彼らの国籍や民族的背景は様々だが、自らの意見を効果的に政策へと反映するため一致団結して活動する。そのために参加者同士、互いの政治観や問題意識を理解し合う必要がある。

しかし、政治・経済のグローバル化に伴い、途上国を救うための国際活動もまた、活動従事者間の格差や、価値観をめぐる断絶に見舞われている。普段、オンラインでのコミュニケーションや組織ネットワークに依拠した連携では分からなかった格差や断絶が、直接のコミュニケーションにおける言語や資金、情報といった能力・資源の隔たりにより如実化するということも十分にある。

こうした断層はまた、運動従事者が目的を持った集合行動のみならず、ライフスタイルもまた政治的理念を反映した社会運動としてみなすことから、より一層根深いものとなる。単純な資源の多寡の問題だけではなく、運動と生活のロジスティクスを通じ、信仰や思想をめぐる衝突が起きてしまう。

世界の経済格差を是正するはずが、活動従事者らの間に意識の断層があるため、合意を形成できない状況がある。では、どのような場面でその衝突や格差は顕著となり、またどのようにすれば衝突や格差を乗り越え、相互理解が可能になるのだろうか。本研究は国際的閣僚会議に対する抗議行動の研究を通じて、異質性や多様性の高い他者と理解し合う方途を探るものである。

2. 研究の目的

本研究は、主に「G8 サミット (G7 サミット) 抗議行動」を事例として、国際的な政策介入活動を、人々の政治観や社会的背景が集約された、抗議行動のための「旅」であり、抵抗文化を学び、政治的な学習をする機会でもある「プロテスト・ツーリズム」のプロセスとして捉える。それにより、政治活動従事者の背後にある階層や国籍・職業に基づき政治的問題意識が衝突するメカニズムを分析し、政治活動において相互理解が失敗する原因を明らかにする。

研究代表者は国際的な政治活動における相互理解を、閣僚会議への介入活動参加者を外部参加者である「ゲスト」と現地居住者である「ホスト」に分類し、政治活動のためのインフラを提供・利用する過程として分析する。その際、ツーリズム研究の分析枠組みを

用いて、参加者間の衝突・断絶がどのような政治的・経済的背景に基づいているのか考察する。

3. 研究の方法

研究代表者はこれまで行ってきた調査研究を踏まえ、アクティビストが集まるスクワッシングハウスやシェアハウスを中心に、そこに訪れた旅人とホストの関係をもとに研究を行ってきた。ホストは政治活動のイベントを企画・設営・宣伝するのみならず、その宿舎での寝食を通じて、ゲストとコミュニケーションを行う。ゲストは異なる場所で「ホスト」となることで、互酬的な関係を作り出し、グローバルな社会運動の伝播を行うこととなる。

世界各地で国際的閣僚会議が開催される際、特にこうしたスクワッシングハウスやゲストハウスは重要な役割を担う。ゲストが合流し、政策介入の活動をする。研究代表者は記録担当として、交通や宿泊、食事や翻訳、医療や通信設備の運営などのインフラを通じたゲストとホストのコミュニケーションを記録する形で参与する。

4. 研究成果

本研究の成果として、参加者同士をめぐる意識の断層は先行研究が明らかにした「議論」や「討議」のみならず、「食事」や「衛生管理」にも現れることが判明した。しかし、討議や議論と異なり、多様なライフスタイルがあるという実態は排除の原因にもなるものの、一方で初心者である参加者たちに対して新しい参加可能性を開く。社会運動の初心者たちは、理念や思想を十全に共有していなくても運動の中で実現されるライフスタイルと親和性があることで活動に参加できるという、新しい運動従事の可能性を見出すことになる。サミットへの抗議行動は、こうした参加者たちへの政治的社会的化の機会でもあったと言える。

もう一つとして、ライフスタイルの共有はゆるやかな「組織」の形成となることが分かった。個人化ゆえに他者と共通の利益が想定できない社会では、そもそも運動のための組織を形成することすら困難になる。アイデンティティを共有することや、組織のルールのもとに運動をすることが困難な現代においては、ある共有された規範やしきたりを守ることが社会運動のコミュニティを形成する機会となるのである。衝突や断絶を経て運動文化が「サブ」へと分化することは、個人化・流動化がすすむ現代において避けられない問題と言える。

人々はとくに「多様性」「公平性」を認めつつ、その中でいかに社会運動をすすめていくかというジレンマに悩むことになる。それが現れる場として、「議論 (言語的コミュニ

ケーション)、「ライフスタイル」の二つの面において、その場における実践から人々の政治的理念が問われ、時として相互理解にいたり、場合によっては衝突することになる。

ここまでは本研究の仮説どおりであったが、コミュニケーションの葛藤は必ずしもホスト・ゲストの間だけで起こるのではない。その理由として、運動を行うにあたってむしろ強い責任や発言力をもつのはかならずしも運動が行われる現地に住む当事者ではないためである。運動の現場や当事者はグローバルな運動の中で入れ替わるため、結果として社会的立場が高いものであったり、より多くの問題にコミットできるものが強い説得力や影響力を持つ。このような「暗黙の影響力」をうまく実践的な役割分担へと移行させるか、あるいはあくまで公平性を担保するという名目のもと影響力の低減に向かうかが、運動の方針を定める一つの岐路だと言えるだろう。

また、グローバリズムに対する運動が見せるもう一つの局面として、ツーリズムやイベントを離れたより身近な「ライフスタイル」への移行がある。社会運動組織が担ってきた社会変革的な活動は、シェアハウスや倫理的消費といった一見政治的ではない活動によって代替されることも珍しくなく、社会運動組織だけを見ていたのではその実態は分からない。

一方で、社会的プラットフォームは完全にばらばらな個人の集合というわけではなく、そこにはゆるやかに人々を繋ぐ規範や秩序がある。シェアハウスやツーリズムといった一見非政治的な場においても、参加者同士の交流や対話が規範・秩序を生み出し、当初ばらばらであった人々の間に共通の目的をもたらし、政治・社会変革の場になることがある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

富永京子, 2018, 「カウンターカルチャーとしての旅 社会運動のツーリスティックな側面を通じて」『立命館言語文化研究』29(3) 査読無, 175-192

富永京子, 2018, 「社会運動のメディア・リテラシー 日常からの逸脱か、それとも日々の延長か」『世界思想』45: 86-90, 査読無

Kyoko Tominaga, 2017, “Social Reproduction and the Limitations of Protest Camps: Openness and Exclusion of Social Movements in Japan” *Social Movement Studies* 17(2): 269-282. 査読あり

Kyoko Tominaga, 2016, “Young Radicals in 2010s: From the relationship between young and elderly protesters” *East Asian Civil Society Dialogue on the Sphere of Intimacy: 4th Hokkaido Dialogue*: 1 : 17-26

Kyoko Tominaga and Takanori Tamura, 2015, *Is an Alternative Deliberation Space?: The Anti-Nuclear Movement and ICT Communication after 3.11 Disaster*, ACCS 2015 Conference Proceedings: 1 : 307-319

[学会発表](24件)

Kyoko Tominaga, 2017, From the Street to Retreat: the Case of Anti-national Security Bill Movement in Japan 2015 *The International Conference: Problems and Perspectives for Japan in a Changing World: Thirty Years of Japanese Studies in Poznan*

富永京子, 2017 「社会運動ツーリズム 『個人化』時代における抵抗と連帯の旅」第90回日本社会学会大会

Kyoko Tominaga, 2017, “From Counterculture to Subculture: The Study of Social Movement in Japan after the 3.11 Disaster” *Monash Asia Institute (MAI) and Japanese Studies Centre (JSC) Special Public Seminar*

Kyoko Tominaga, 2017 “Consumer Movement in Fluidarity and Individuality: Comparing Individual Practices of Consumer Movement” *6th French Network for Asian Studies International Conference*

富永京子, 2017 「ポリティカル・ツーリズムとしての社会運動」『関東社会学会第65回大会』

Kyoko Tominaga, 2016 “Everyday Life and Politics in Youth: The Japanese Case in 2000s” 国立東華大学社会学系専題演講

Kyoko Tominaga, 2016, “Young Radicals in 2010s: From the relationship between young and elderly protesters” *East Asian Civil Society Dialogue on the Sphere of Intimacy: 4th Hokkaido Dialogue*

Kyoko Tominaga, 2015, “Alternative World is not Equal: What Factors Create the Hierarchy among Activists?” *12th Conference of the European Sociological Association*

Kyoko Tominaga and Yusuke Kanazawa, 2015, " Leftist Magazines and Social Movements: A Study of the Networks between Activists Writers/Editors, " *Sunbelt XXXV International Sunbelt Social Network Conference*

Kyoko Tominaga and Takanori Tamura, 2015, " Alternative Deliberation Space is Possible? : Anti- Nuclear Movement and ICT Communication after 3.11 Disaster " *ACAS/ACCS 2015 Conference*

富永京子, 2015 「社会運動のサブカルチャー化 「2008年G8サミット抗議行動」での経験に焦点を当てて」『第三回 サテライト研究会』

〔図書〕(計5件)

富永京子, 2017 『社会運動と若者 日常と出来事を往還する政治』(ナカニシヤ出版), 280.

富永京子, 友枝敏雄, 浜日出夫, 山田真茂留 (編), 2017 「社会運動」『社会学の力 最重要概念・命題集』 有斐閣, 312 (152-155) .

富永京子, 『社会運動のサブカルチャー化 G8 サミット抗議行動の経験分析』2016 (せりか書房), 336.

富永京子, 野宮大志郎, 西城戸誠(編)他, 2016 「第3章 グローバルな運動への参加の回路: 洞爺湖G8サミット抗議活動に関わった「地元参加者」の声」『サミット・プロテスト グローバル化時代の社会運動』 新泉社, 352(108-134) .

富永京子, 山崎望(編)他, 2015 「第3章 社会運動の変容と新たな『戦略』 カウンター運動の可能性」『奇妙なナショナリズム 排外主義に抗して』 岩波書店, 272 (113-138) .

〔産業財産権〕なし

〔その他〕

ホームページ等
Kyokotominaga.com

6. 研究組織

(1) 研究代表者

富永 京子 (TOMINAGA, Kyoko)

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号: 70750008